

平成28年度

## 第19回「ちゅうでん児童文学賞」贈呈式のご報告

平成28年度は、応募総数223編という、過去最多の作品が全国各地より届けられました。

作品の募集締切は8月末。その後、予備選考を重ね、2月に最終選考会を行いました。結果、大賞1編と優秀賞2編の計3編が受賞となりました。

応募の状況としては、男女別にみますと、例年同様に男女比はほぼ半分半分。年齢層も例年同様に40～50代が中心でした。しかし、10～20代の方が全体の約1割で、受賞候補に残った7編のうち4編が30代の方の作品というのは、若手の皆様の勢いを感じる印象的な結果でした。

平成29年3月5日には、名鉄ニューグランドホテル(名古屋市)にて贈呈式・記念講演会を開催いたしました。関係者と一般応募の200名を超える皆さまにご来場いただくなか、贈呈式では、受賞された森埜こみちさん、川村マミさん、平井美里さんに、当財団理事長より賞状と副賞が手渡されました。

講演会では、選考委員の一人であり児童文学作家の富安陽子さんに『お話の種の育て方』というテーマでお話いただきました。子どもにある“不思議を持つ力”の、温かくもユーモア溢れるお話を伺うことができ、大変楽しい時間となりました。

大賞	『一句献上いたします』	もりの 森埜  こみち  さん
優秀賞	『空き家のシャーロット』	川村  マミ  さん
	『ハシルオモイ』	平井  美里  さん



理事長と受賞者の皆さま

(左から、佐々木理事長、優秀賞：平井さん、大賞：森埜さん、優秀賞：川村さん)

## 「第19回 ちゅうでん児童文学賞」贈呈式

開催日：平成29年3月5日（日）

まずは、理事長の佐々木敏春からご挨拶させていただきました。



皆さん、こんにちは。

理事長を務めております佐々木でございます。

本日は「第19回ちゅうでん児童文学賞」にこのように多数お集まりいただきまして、誠にありがとうございます。審査いただきました、斉藤洋先生、富安陽子先生、鷺田清一先生におかれましても、遠方より、またお忙しい中お越しいただき、本当にありがとうございます。

まず、私どもちゅうでん教育振興財団のお話をさせていただきたいと思えます。私どもの財団は、21世紀の世の中を担っていく子どもたちの心、体の健全な発達、情操の豊かな発達というものを目指して、平成13年に中部電力50周年を記念して設立いたしました。大きな柱の事業として、教育振興助成、教育大賞、工作コンクール、それとこの児童文学賞となっております。

今年度ですが、教育振興助成に関しましては、全国の小・中学校から300件を超える応募をいただき、その160件ほどを対象に、また福島、熊本は復興に向けて子どもたちが元気になるように、助成させていただきました。工作コンクールについては、全国の小学生から応募があるわけですが、子どもたちがリサイクル品を使って、一年をかけて創り上げてくる作品は本当に目を見張るものがあり、日本の子どもたちの創造性・独創力の高さを実感するところでございます。

そして児童文学賞は、ここに書いてございますように、19回目を迎えることになりました。今回223編の応募をいただき、一次選考、二次選考、最終選考と、十数人に渡る専門家の方々の目を通して、大賞と優秀賞、合計3作品が受賞となりました。

私も受賞作を読ませていただきました。主人公が、ある事件を目撃する、クラスメイトの自分とは違う姿を見つめる、そこで心の中にざわめきが起り、相手を意識をしていく、思いを馳せる、共感していく、そうした心の成長を描いています。どの作品も、涼しげな風が通り過ぎて行くような、爽やかな気持ちにさせてくれました。

今回大賞を受賞された森埜さんは、実はこの文学賞に4年連続で応募をいただいております、2年前の17回では優秀賞を受賞されました。彼女の努力に対して本当に敬意を表しますし、心より感謝を申し上げたいという気持ちでいっぱいでございます。そして、こうして日々物語を紡いでいる方がいて、その物語を読む子どもたちが感動でき、その架け橋となっているのが我々だと思いますと、我々がやらなくてはいけないことを改めて認識させられる次第でございます。

実はここで受賞した作品は全国2,400の図書館や800の小・中学校に配布されます。ですから、その本を図書館や学校で手に取る子どもたちがこの先にどれくらいいるのかと思うと、胸膨らむような、ワクワクする思いがいたします。

最後になりますけれども、本日ここにお集まりいただいた皆さま、そして、選考に携わっていただきました多くの先生方に心から感謝を申し上げまして、私の挨拶とさせていただきます。

どうもありがとうございました。

次に、選考委員の先生方から、ご講評をいただきました。

<齊藤 洋 先生>

受賞された皆さま、どうもおめでとうございます。齊藤でございます。

私の作品に出てくる猫の『ルドルフ』\*がですね、この辺りから岐阜に通過しちゃいまして、どうもすみません(笑)。

今回は3名の方が賞を受賞されましたが、これは運もあるんですよ(笑)。

選考委員は3人おりまして、その3人ともが全く同じ意見というわけではないんですね。稀にですね、非常に、断トツに優れている場合は、意見が一致することもあるかもしれませんが——『ルドルフとイッパイアッテナ』がそうですよね(笑)。そういうことでないと、人がかわれば順番が違ってしまう、そういうものなんですよ。

ですから、今回大賞が取れなかったとしても、チャンスはいくらでもあるんですから、前向きにね。逆に、大賞を取ったからといって、偉いなんていうものでもないんです。謙虚な思いで、これからも書いていただければと思います。



\*『ルドルフとイッパイアッテナ』（講談社）

ひょんなことから、長距離トラックで岐阜から東京に来てしまった黒猫ルドルフ。その土地のボス猫イッパイアッテナと出会い、愉快的ノラ猫生活が始まった……。猫と人間、それぞれの愛と友情の物語。

この日の名古屋は天気にも恵まれ、たくさんのご来場者をお迎えすることができました。遠くは静岡県は磐田市より、選考委員の先生方も遠方よりお越しいただき、ありがとうございました。



<富安 陽子 先生>

受賞者の皆さん、この度はおめでとうございます。

この賞の最終選考は三人の選考委員で行っています。私はもともと大変気の弱い人間なので選考会当日はいつも非常に緊張します。三人の意見が全く食い違っていたらどうしようとか、そうなったらどうやって自分の意見を主張しようかとか…。



確かに三人の意見が全く同じということはないのですが、でも幸いにして、上位に選ばれる作品については、評価はそんなにばらけません。どれを一番に推すかという意見は違っていても、これはいいなという作品の基準には共通点があるのだと思います。今回の三作品もそうでした。

今年は、三つの作品が全てリアリズム作品でしたが、同じリアリズムでもこんなに持ち味が違うのだなという思いで楽しんで読ませていただきました。

森埜さんの、俳句を作る子どもたちの物語は大変生き生きとしていて、特に作中に登場する俳句がどれもいいので、私はてっきり作者はご自身でも俳句を作っておられる方だろうと思っておりました。句作はなさらないと知って驚いています。

川村さんは、胸がヒリヒリするような、複雑で痛々しい子どもらの関係をきっちりと描いていらっしやって、緊張感のある作品に仕上がっていたと思います。

平井さんの作品は、恋模様とまではいかない、中学生たちの揺れる思いをさわやかに描いた清々しい作品でした。

お三方とも、それぞれに力のある方たちだと思いましたが、受賞というのはひとつのスタートラインです。ここから、どうやって、どういう世界を創り出していくのかということが大切だと思います。これからのご活躍を祈っております。

本日は本当におめでとうございます。

富安先生には贈呈式後の記念講演会でたっぷりと楽しいお話を聞かせていただきました。

◇◇講演テーマ◇◇ 『お話の種の育て方』



※今回、300名の方からお申し込みいただき、抽選となりました。たくさんのお応募、ありがとうございました。

< 鷺田 清一 先生 >



本日はご受賞、おめでとうございます。

私たちが審査する時は、作者のお名前をもちろん存じ上げないんですが、「森埜こみちさん」という大賞者のお名前にドキッとしました。ご存知ないかもしれませんが、20世紀を代表するドイツの哲学者の本に「林の道」という本があったのを思い出しドキッとしました。先日、かつてリスト国際ピアノコンクールで準優勝された方のコンサートがありまして、すごく迫力のある演奏だったんですが、そのピアニストのお名前が野原みどりさんっていう(笑)。名前っていうのは面白いですね。

私は選考委員で、作品を選考して、こうして選評を語っていますが、いつも困っています。私自身は、斉藤さんや富安さんみたいに児童文学の作家ではなくて、いつも候補作を読みながらも、児童文学って、児童って、子どもって、何だろうと、頭にチラついてしまいます。

今年もそんなだったんですけど、実は読んでいる最中に、舞城王太郎さんという小説家の最新作の中で、「あ、そういうことか」と思えるヒントに出会いました。小学5年の娘さんに中学生のボーイフレンドができて、お母さんがパニック状態になられるんです。NHKで『お母さん、娘をやめていいですか』という母親から逃げられない娘さんのドラマがありました。それに近い状況の中で、でもすごく聡明な娘さんで、二人でいろんなやりとりがあるんですが、お母さんが少し冷静になって「母親失格かもしれないね。あなたに一般的な子どものイメージを押し付けちゃったみたい」って言った時、娘さんがこう言うんです。「だってママ、私しか子どもを育ててないもんね。間違いとかあるもんだよ。私だって生きてるの初めてだし」。はあ～と思いました。

よく考えたら、皆、子どもであるのは一回きりだし、親にとってもその子を育てる経験というのは一回こっきりなんですよね。なるほどと思って、子どもって何だろうというモヤモヤしていた問いに、ちょっと光が差してきたんです。

つまり児童文学といっても、子どもをそのまま描くことはあり得なくて、子どもそのもの、ありのままの子どもなんてありっこない。みんな違う。だから、大人から見た子どもを描く。でもそれは、大人が子どもに「子どもってこういうものだ」とイメージをかぶせて、子どもの存在を横取りすることですよね。特に、多くの場合、子どもに対する固定観念があって、それは往々にして、自分が失ったものとか、あるいは自分が見果てた夢なんかを子どもに重ねて、子どもは純粋で無垢な存在だとか、子どもは未熟、弱い存在、保護されるべきとか、何かもう、大人が自分が見果ててしまったイメージを子どもに押し付けて。

児童文学っていうのは、今の段階ではですが、子どもが自分でも気が付いていない自分、それから大人がまだ見届けられてない自分の中の子ども、そういう二つがシンクロするのが、あるいは対話をするのが、児童文学なのかなと思いました。

子どもって何かというのは、大人って何かっていうこと、更には人って何かっていうことまで繋がる、答えのない、でもものすごく大事な問いなんだろうなというふうに、現時点で思っています。そんな目で点数を入れさせていただきました。

どうもありがとうございました。

次に、受賞者の皆さまからもお言葉をいただきました。

**【大賞】森埜 こみち さん 作品名『一句献上いたします』**



私はこの賞に4年連続、挑戦しました。この賞を目標にして、この賞に励まされて、この賞に叱咤されて、本当に育てていただきました。

作品を出版していただけることは望外の喜びです。本を読んだ子どもたちのところが少しでも軽くなるがあれば、私は涙がでるほど嬉しいです。

ちゅうでん児童文学賞に関わる全ての方にお礼を申し上げます。ありがとうございました。

**【優秀賞】川村 マミ さん 作品名『空き家のシャーロット』**



このような素晴らしい席にご招待いただき、優秀賞を受賞できたことを大変嬉しく思っております。審査員の先生方をはじめ、スタッフの皆さまに感謝申し上げます。

実はここで暴露してしまいますと、1ヶ所間違いを原稿の中でしておりまして、応募した後に友達に指摘されて、ああ今年もダメだとずっと思い続けておりました。ですので、お電話をいただいた時はビックリいたしました。

こんな風におっちょこちょいな私ですが、これからも、コミカルな作品、ファンタジー、いろいろチャレンジしていきたいと思えます。

**【優秀賞】平井 美里 さん 作品名『ハシルオモイ』**



今、この場に立てることを非常に嬉しく思っております。関わってくださった皆さま、それから、今まさに、この場にいてくださる皆さま、ありがとうございます。

優秀賞の連絡いただいた時、一番初めに思ったことは、「もうちょっと書いてもいいんだ」ということです。世の中にはたくさん、それこそ選考委員の先生方の生み出されるような物語ですとか、エッセイですとか、素晴らしい作品がいっぱいあって、読むだけでも時間が足りないのに、私のはたして生み出すことに時間を費やしていいんだらうかと悩んでいた時に、連絡をいただきました。羨みかけていた気持ちをもう一度ふくらましていただいたような思いしております。ぜひまた挑戦していきたいなと思えます。本当にありがとうございました。

大賞を受賞した『一句献上いたします』は、出版に向けスタートしました。誰の心にも届く一冊になることを、スタッフ一同、心より願っております。